



ライスシック

沼田市立沼田南中学校 3年

浅沼 寛奈

「えっ、甘い！」今まで食べていたお米がこんなにも甘かったなんて…。

私はこの夏休み、市の国際交流事業に参加し、オーストラリアでホームステイをしました。「郷に入れば郷に従え」ということわざがあるように、私はこの機会を利用して、その国の文化や習慣を体験し受け入れようと意気揚々としていました。見るもの、聞くもの、することすべてが私には新鮮で日本の生活との違いに関心したり、驚いたりしていました。海外へ来ているのだと実感出来る日々でした。当初は好奇心や緊張感があり、ホストファミリーに気遣って生活面ではあわせていましたが、食文化だけは日に日に受け入れることができなくなっていました。心は受け入れようと努力していましたが、身体が受け付けなくなり、拒否反応を示すようになってきました。食事はパン食が中心で、味も濃く、野菜もほとんどとっていいほど皆無。数日後、目の前に、お肉の脇に白米が添えられて出てきたときには、おもわず唾を飲み込んでしまうほどうれしく思いました。しかし久々の白米を口にした瞬間、呆然としてしまいました。口の中でパラパラしていて、味気もなく、自分の記憶にある白米とのギャップに愕然としました。私は、楽しみだっただけにショックが大きかったです。食事の時間がくるたびに心がだんだん寂しくなってきました。これぞまさに、ホームシックならぬ、ライスシックでした。

日本にいる家族を思いだしてホームシックにかかるという話は聞いたことがありましたが、私は日本のお米が恋しくてライスシックになってしまったのです。

食事以外は本当に楽しいホームステイだったのでホストファミリーとのお別れも寂しかったですが、日本行きの飛行機に乗った瞬間、頭の中はあつあつの炊き立て白ご飯がよぎっていました。

帰国後、私の思いが通じたのか、はじめての食事は、「ごはん、味噌汁、焼き魚」と母がいつものように作ってくれていました。

私は「いただきます！」とまず先に白いご飯に手を伸ばしました。いつも使っていた茶碗の丸い感触、そして久しぶりに使うお箸の感覚を確かめるようにパチパチさせてみました。そして待ちに待った、白いご飯。眺めてみると、こんなにもお米は透き通っていたのかと思うほど輝いていました。お米の一粒一粒が、「おかえりなさい！」としゃきんと背を伸ばして笑っているように見えました。口にほおばり、ぐっと奥歯で噛み締めると、口の中じゅうに甘さが広がり、もっちりしていて、私は母に「今日の日のために、わざわざ新しいお米買ったの？」と聞きました。母は「いつものと同じだよ。」と言いました。

海外に行って、いろいろな文化や伝統を体験することでその国のよさを見つけたり、また、改めて自分の国、日本のよさを感じる事が、国際交流事業の狙いですが、私にとっては「日本のお米のよさ」を知ることができたことが、大きな収穫でした。

これからもお米とは長いお付き合いになるけれど、日本に生まれたこと、そして日本のお米に出会えたこと、それから、そんなおいしいお米を作ってくださいる農家の方々に感謝して、いただこうと思いました。